

<国語>

主体的・対話的で深い学びを実現する国語科授業の在り方 ～「扇の的—『平家物語』から」の授業実践を通して～

大垣市立東中学校 教諭 小酒井 保乃佳

【概 要】

今日的な課題と本校の生徒の実態から、予測困難な時代を生きる子どもたちが主体的に考え、自ら学びを獲得し、自分自身の未来を切り拓いていく力を身に付けさせたいと考えた。

そこで、本研究では、「扇の的—『平家物語』から」の学習を通し、「古典に表れたものの見方・考え方」に対して個人テーマを立て、追究した。それらを通し、主体的・対話的で深い学びの実現を図れば、生徒一人一人が、主体的に考え、自ら学びを獲得し、自分自身の未来を切り拓いていく力を身に付けることに通ずると考えた。

学習の個性化を図り、一人一人が追究したい「個人テーマ」を立てることで、古典という教材に対しても、興味をもって主体的に学習に臨む姿勢がみられた。しかし、一斉指導の中では、一人一人が立てた個人テーマをより質の高いものへと変化させるための指導をさらに充実させていく必要があるという課題も見つかった。

1 主題設定の理由

(1) 今日的な課題から

子どもたちは、変化が著しく、予測困難な時代を生きている。

中央教育審議会答申（平成 28 年 12 月）には、「近年顕著となってきたのは、知識・情報・技術をめぐる変化の速さが加速度的となり、情報化やグローバル化といった社会的変化が、人間の予測を超えて進展するようになってきている。」とある。また、「第4次産業革命ともいわれる、進化した人工知能が様々な判断を行ったり、身近な物の働きがインターネット経由で最適化されたりする時代の到来が、社会や生活を大きく変えていくとの予測がなされている。」とある。

中学校学習指導要領解説総則編（平成 29 年 7 月）には、「今の子供たちやこれから誕生する子供たちが、成人して社会で活躍する頃には、我が国は厳しい挑戦の時代を迎えていると予想される。」、「生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会構造や雇用環境は大きく、また急速に変化しており、予測が困難な時代となっている。また、急激な少子高齢化が進む中で成熟社会を迎えた我が国にあっては、一人一人が持続可能な社会の担い手として、その多様性を原動力とし、質的な豊かさを伴った個人と社会の成長につながる新たな価値を生み出していくことが期待される。」とある。

(2) 生徒の実態から

本校の生徒の実態として、小集団活動の中で、協力して活動を進めたり、自分の考えを進

んで伝えたりする良さがある。しかし、考えを互いにぶつけ合いながら練り合っていく姿が弱く、人の意見に流され、主張しきれない姿や、与えられたことや決められたことには意欲的に取り組めるが、自ら課題を見つけ、追究することに弱さがみられる。

そこで、本研究では、中学2年「扇の的—『平家物語』から」の学習を通し、古典に表れたものの見方・考え方に対して個人テーマを立て、追究した。古典にあらわれたものの見方・考え方に対して個人テーマを立てることは、自ら追究したい課題を見つけることに通じ、主体性をもって学習に臨むきっかけに繋がり、仲間と共に追究した個人テーマについて交流し、考えを伝え合い、学びを深め合うことで、人の意見に流され、主張しきれないという弱さを克服するきっかけに繋がると考えたからである。

以上のことから、中学2年「扇の的—『平家物語』から」の学習を通し、古典に表れたものの見方・考え方に対して個人テーマを立て、追究し、主体的・対話的で深い学びの実現を図れば、生徒一人一人が、主体的に考え、自ら学びを獲得し、自分自身の未来を切り拓いていく力を身に付けることに通ずると考えた。

そこで研究仮説を以下のように考えた。

2 研究仮説

言葉による見方・考え方を働かせる単元や単位時間の構成を工夫し、個別最適な学びと協働的な学びの一体化と充実を図れば、多面的・多角的に物事を見つめ直し、考えを広げ深める生徒を育成することができる。

3 研究内容

研究内容 1 指導計画の工夫

(1) 学ぶ魅力・必然性のある単元指導計画の工夫

- ・単元の目標と言語活動の内容を明確にした導入の工夫（何ができるようになるのか、そのためにどんな活動に取り組むのか）
- ・生徒の意識の流れを考慮し、「考えの形成、共有、再構築」の学習過程を重視した指導計画の作成の工夫

(2) 評価の工夫

- ・単元で身に付けた力を実感する終末の在り方の工夫（学習の調整を行う場の設定）

(3) 身に付けた力を他の単元や実生活で活用するための手立ての工夫

- ・身に付けた力を「みえる化」し、分類・整理・蓄積するための指導

研究内容 2 個と集団に応じた指導・援助の工夫

(1) 学習の個性化

- ・生徒の興味・関心、キャリア形成の方向性に応じた学習活動の工夫（探究においての課題設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現）
- ・どのような方向性で学習を進めていけば良いのか見通しをもつ場の設定

(2) 主体的・対話的で深い学びを進める小集団交流の在り方

- ・交流の意図や視点を明確にした学習形態の工夫
- ・言葉への自覚を高めさせる指導の工夫

4 研究実践

研究内容 1 指導計画の工夫

(1) 学ぶ魅力・必然性のある単元指導計画の工夫

生徒が主体的に学習に取り組むためには、生徒がその単元や教材に学ぶ魅力や必然性を実感することが大切である。

古典では、現代を生きる私たちにとって離れた時代に書かれた文章を学ぶ。古典に表れたものの見方・考え方には、現代に通ずるものもある。それらに触れることに、古典を学ぶ魅力があると考えた。

また、古典を学習し、様々なものの見方・考え方に触れることは、予測困難な時代を生きる

中で、自らの生き方を模索している中学生にとって、必要であると考えた。

古典に表れたものの見方・考え方には、現代に通ずるものもあれば、現代とは異なるものもあるということを実感させることで、予測困難な時代を生きる子どもたちが広い視野をもち、自分の生き方を模索する手掛かりを得て欲しいと考えた。

そこで、単元を通して身に付けさせたい力を「古典に表れたものの見方・考え方と自らの知識や経験を結び付ける中で、考えを広げ深める力」と設定した。そして、単元の最後には、「平家物語」に表れたものの見方・考え方について自分の知識や経験と結び付けて意見文を書く活動を位置付けた。

単元 5 時間の計画は以下の通りである。

時	ねらい	中心となる活動
1	「平家物語」の特徴や時代背景を整理することを通し、作品の特徴を生かして冒頭部分を音読することができる。	・「平家物語」の冒頭部分、「扇の的」を音読し、和漢混交文のリズムに慣れ親しむ。
2	「扇の的」の原文と現代語訳を対応させながらあらすじを理解することを通し、古典の文章独特の調子やリズムを意識しながら朗読することができる。	・原文と現代語訳を対応させながら読み、「扇の的」のあらすじを理解する。
3	「扇の的」、「弓流し」の場面から、登場人物の心情を読み取ることを通し、それぞれのものの見方・考え方を捉えることができる。	・「扇の的」の場面における那須与一、平家、源氏の心情を読み取る。
4	現代語訳や語中、読み取ったことを基に問いを設定することを通し、それらに対する自分の考えを、根拠を明確にしてまとめることができる。	・読み取りを基に、「扇の的」、「弓流し」の登場人物について感想を交流し、問いを設定する。
5	問いを立てて追究した「平家物語」に表れたものの見方・考え方と知識や経験を結び付け、対話を通して物事に対する新たな視点を獲得する中で、自分の考えを広げ深めることができる。	・設定した問いについて追究したことを基に登場人物のものの見方が現代にも通ずるのかを、根拠を明確にしながら交流する。

図表 1 「平家物語」の単元指導計画

生徒には、導入時に「自分の知識や経験と結び付けて意見文を書く」という単元のゴールを伝え、単元の学習をスタートした。そうすることで、常に「古典に表れたものの見方・考え方は現代に通ずる部分があるのか」という視点で「平家物語」を「精査・解釈」することができた。

(2) 評価の工夫

単元を通して身に付けた力を実感することができるよう、学習の調整を行う場を設定した。

第5時の導入では、身に付けたい力を確認した。

「古典に表れたものの見方・考え方と自らの知識や経験を結び付ける中で、考えを広げ深める力」

身に付けたい力に近づくために、第5時の交流活動では、以下のポイントを意識して取り組んだ。

考えを述べる際に意識するポイント

- ・本文の叙述と結び付けて話す。
- ・知識や伝聞と結び付けて話す。
- ・自分自身の体験と結び付けて話す。

また、交流活動の前には、自分が3つのポイントのうち、どれを意識して話し合うかを決めさせた。

交流終了後には、学習の調整を行う場を設定した。

学習を調整する場の設定

自分の書いた意見文について交流活動を行った後、自分の立てた問いに対して最終結論をまとめる時間を設けた。その際、意識するポイントは以下の通りである。

「誰の」、「どんな考え」を受けて自分の考えが広がり、深まったのか明らかにする。

A子は、以下のような問いを立てた。

勝利と平和、どちらが大切か。

また、この問いに対し、以下のように考えた。

源義経の時代は勝利、現代ではどちらも大切である。

このように考えた理由を含め、意見文を書いた。

私は、「平家物語」という作品を読んで、源氏と平家の戦いへの考え方の違いが気になった。なぜなら、物語の中で、源氏は年五十ばかりなる男を射たときにえびらをたたいてどっと歓声をあげ、戦いには絶対に勝つという強い気持ちで臨んでいるが、平家は真剣な戦いの中で扇的を出し、「戦占い」を始めたり、与一が扇的を射ることができたときに敵ながら感嘆したりしていたことから、平和を望んでいるのではないかと考えた。

ここから、私は「勝利と平和、どちらが本当に大切なのか」という個人テーマを設定した。

私は、昔は勝利がとても大切にされていたが、現代では勝利も平和もどちらも大切にされていると考えた。

この戦いが起こった鎌倉時代の頃、戦いに敗れてしまえば、命を奪われてしまうため、絶対に勝たなければならなかった。しかし、現代では、戦争が起こった際、戦いに勝利しても、市民の命を奪ったことに対する批判が寄せられる。人の命を奪ってはいけないという考えが浸透している現代だからこそ、昔と勝利の意味が異なると感じた。

図表2 A子の意見文(一部抜粋)

A子は仲間との交流活動の後、最終結論として、このようなまとめを書いた。

私は初め、平家が戦いに勝つことよりも、平和に解決することを望んでいると考えて、平家と源氏を比較していた。しかし、仲間との交流を通し、B子さんの「平家も戦いに勝つことを重んじていたのではないか」という考えを聞いて、自分の考えが広がった。

平家が扇的を出して射させているのは、一見、平和的に戦いを終わらせたいように見えたけど、扇まで距離がとても遠く、与一は射ることができるはずがないと思っていたからだ。この作戦は、与一が逃げても、失敗しても平家側にとって有利な作戦だったからこそ、平家は平和を望んでいるのではなく、勝利を重んじていたということが分かった。

このことから、平家もやはり勝利を大切にしていたと自分の考えが広がり、深まった。

「誰の」、「どんな考え」をもとに自分の考えが広がり、深まったのかを明らかにすることで、仲間との対話により、生徒が自分自身の変容を自覚し、単元を通して身に付けた力を実感することに繋がった。

(3) 身に付けた力を他の単元や実生活で活用するための手立ての工夫

身に付けた力を実生活で活用していくため、読書生活に繋げていく意識を醸成した。読書を通じて、作者との対話、作品との対話、自己との対話をするにより、主体的・対話的に学ぶ中で獲得した学びを深めることができると考えるからである。

中学校学習指導要領(平成29年告示)解説
国語編には、「〔知識・技能〕(3)我が国の言語文化に関する事項 オ 読書が、知識や情報を得たり、自分の考えを広げたりすることに役立つことを理解すること。」とある。また、「〔知識・技能〕の(3)『エ 本や文章などには、様々な立場や考え方が書かれていることを知り、自分の考えを広げたり、深めたりする読書に生かすこと。』などに関連を図り、日常の読書生活と結び付けることが考えられる。」とある。

そこで、本単元の終末には、読書を通じて様々な知識を得たり、様々な考えに触れたりすることで、自分の考えを広げたり深めたりすることができることを説明した。また、教室内に学級文庫を設置し、生徒が様々な本に触れられる環境を整えた。その結果、生徒が学級文庫に興味をもち、本を手にする機会が増えたり、「この本を読んで、このような考えをもった。」と仲間に感想を伝えたりすることが増えた。

研究内容2 個と集団に応じた指導・援助の工夫

(1) 学習の個性化

本実践では、一人一人の進度・達成度に応じた指導方法、教材や学習時間の柔軟な提供・設定(生徒が学習調整をしながら、学習を進めていける指導の在り方)を実現するために、「平家物語」の精査・解釈を基にした素朴な感想を起点として、それぞれが個人テーマを立てて、追究した。

初めに、仲間と「平家物語」を読み取る中で生まれた素朴な感想を交流した。この際、以下のような感想が出た。

「平家物語」に対する感想

- ・源義経は、自分の上司にいたら嫌だ。なぜなら、与一が「手前の力では及びませぬ。」と言ったのに、義経の命令は絶対といって、無理やり扇的を射る人として任命したから。
- ・那須与一は与えられた仕事を確実にやり遂げていてカッコいい。

次に、仲間と交流した感想を基に、追究したい「個人テーマ」を立てた。この際、ポイントとして、以下の内容を示し、深まりのある問いを立てることを意識させた。

問いを立てる際のポイント

- ・自分勝手な読みに終始していない問いであるか。
- ・対話の必然性を持つ問いであるか。
- ・物語の表層だけにとらわれていない問いであるか。

その結果、以下のような問いを立てることができた。

個人テーマ例

- ・勝利と平和、どちらが大切か。
- ・源氏のようにプライドを重んじる生き方は、現代に必要なか。
- ・源義経が自分の上司だったらどうか。

また、個人テーマを立てた後、教師が一人一人の立てた個人テーマを確認し、問いを立てる際のポイントと照らし合わせて、より深まりのある問いへと質を高めていくことができるようアドバイスをした。

個人テーマの変容の例

- ・源義経が自分の上司だったらどうか。
- 源義経のようなリーダーは現代でも受け入れられるか。

その結果、一人一人が立てた「個人テーマ」に向けて主体的に学習に取り組む姿勢が見られた。

(2) 主体的・対話的で深い学びを進める小集団交流の在り方

主体的・対話的で深い学びを実現するため、第5時の交流活動では、以下の点を指導した。

初めに、交流の目的や視点を明確にすることである。今回の交流の目的を

自分や仲間の考えは正しいのか。
～話し合いを通じて考えを広げ、深めよう～と設定した。また、本時の授業で身に付けたい力は

「古典に表れたものの見方・考え方と自らの知識や経験を結び付ける中で、考えを広げ深める力」

である。そのために、以下のポイントを意識して話すことができるよう指導した。

考えを述べる際に意識するポイント

- ・本文の叙述と結び付けて話す。
- ・知識や伝聞と結び付けて話す。
- ・自分自身の体験と結び付けて話す。

また、以下のポイントを意識して仲間の話を聞くことができるようにした。

話を聞く際のポイント

- ・話し合いの目的・流れを意識して聞く。
- ・仲間の発言の要点を捉える。
- ・共通点と相違点を聞き分け、相違点のみメモをする。

活動の概要は以下の通りである。

交流活動の概要

- ・交流の時間は27分間行う。
- ・3～4人のグループで話し合う。
- ・一人の意見書について考えたことを伝え合い、検討することを3～4人分繰り返す。
- ・仲間の書いた意見書、メモ用紙を手元に持って、メモしたり線を引いたりしながら話し合う。

グループの人数は、3～4人に設定し、交流活動を自分事として捉えることをねらった。

また、交流の目的を達成するために、話し合いのポイントや交流活動のモデルを掲示し、仲間の考えに繋げて主体的に話し合いを進めることができるようにした。

【聴く力】

- ・話し合いの目的・流れ(方向)を意識しながら聴く。
- ・仲間の発言の要点を捉える。
(主張が何で、そのように考える根拠は…)
- ・自分の考えとの共通点や相違点をはっきりさせながら聴き、相違点のみメモをする。

【話す力】

根拠を明確にした述べ方

- ・自分の結論を述べ、その後に必ず、根拠を述べる。「私は…だと思います。理由は…だからです。…の表現から考えると…だと分かります。」

新しいことを話し出すときの述べ方

- ・今までの流れとどう繋がるのかはわからないですが…
- ・新しいことを話しますが…

仲間の発言との関係をはっきりさせた述べ方

- ・〇〇さんと△△なところが似ていて…
- ・〇〇さんと私の意見は多分違うと思うのですが…

図表3 話し合いのポイント(一部抜粋)

私は、源氏という組織に着目し、源氏という組織のあり方は現代に通ずるのか。」という問いを立てて、追究したよ。前提として、源氏という組織を通して、**上下関係を重んじるというものの見方、考え方**があることを捉えたよ。

源氏には、源義経というリーダーがいて、「義経の命令は絶対」という掟があるんだ。例えば、年五十ばかりなる男が舞を舞った時、伊勢三郎義盛が「御定ま、つかまつれ。」という言葉で与一にかけ、与一は男を弓で射倒さなければいけない状況になる。「義経の命令は絶対」だから、与一が仮に「人の命を奪うことはしたくない。」と思っても、有無を言わず男を射なければいけないんだ。

私は最近、ある県知事についてのニュースを見たよ。ニュースで知り得た情報から、真偽は分からないけど、県でポスターを作成した際、知事は自分の顔が載っていないということに激高し、作り直させたという話があったよ。そこに、「行き過ぎた指示はよくない」、「指示を断ると激高する」というのはよくない」という世間の声があったよ。

このことから、**非情な内容であっても、上司の命令に必ず従って仕事をしなければならないという、行き過ぎた上下関係の重んじ方は現代には通じない**と思ったよ。

僕はAさんの話を聞いて、非情な内容であっても、上司の命令に絶対従わなければならないという、行き過ぎた上下関係の重んじ方は確かに現代には通じないと思ったよ。

でも、**源氏の組織について社会の授業で習ったことを思い出してみると**、源氏は武士という身分の人々で構成された組織であり、武士には自分たちに領地を与えてもらう代わりに、主君のために命を賭けて戦わなければならないという制約があったんだ。上司が自分を大切にしてくれているということに応えたいからこそ、どんな命令でも命を賭けて臨まなければならないという風に考えるんじゃないかな。

図表4 交流活動のモデル

第5時を迎えるに当たり、いつ、どんなときでも話し合いのポイントを意識して話し合うことや、話し合いのポイントの掲示に記載されている言葉を活用して発言することを意識付けた。そうすることで、生徒は、朝の会、帰りの会で行われる班会議や国語以外の授業での全体交流など、様々な場面で話し合いのポイントを意識して発言することに努めた。また、聞

き手はただ話を聞くだけでなく、自分の考えと仲間の考えの**共通点と相違点**を聞き分けながら聞くことを意識させた。

その結果、今までの交流活動では、仲間の考えに対し「なるほど」や「分かりました」などの反応で終わっていたが、仲間の考えと似ているところ、違うところを聞き分けながら聞くことができるようになり、より深まりのある話し合い活動を行うことができるようになった。その中では、聞き分けたことをメモしたり、仲間の意見書に線を引いたりしながら聞く姿もあり、自ら学びを深めようとする姿勢が高まったと感じた。



写真1 交流活動の様子

交流活動の際、教師による机間指導には時間がかかり、全グループを回るまでに話し合いが終わってしまう可能性がある。そこで、意見文を書く際には、意見文と合わせて「疑問に思う点、不安に思う点、さらに考えてみたい点」に着目させ、自ら考えることで、交流活動の際に話し合いが行き詰まった時、それらに立ち返って話し合いが進められるようにした。

「疑問に思う点、不安に思う点、さらに考えてみたい点」の例

- ・平家は本当に平和的に戦いを終わらせたいという思いだけでいつも戦っていたのか。勝利にはこだわっていなかったのか。

その結果、27分間の交流活動では、「疑問に思う点、不安に思う点、さらに考えてみたい点」に立ち返り、どのグループも話し合いが滞ることなく、主体的に自分の考えを広げ、深めようとすることができた。

5 研究の成果(○)と課題(△)

改善の方向(→)

(1) 研究内容1について

○単元の目標と言語活動の内容を明確にした導入(何をできるようになるのか、そのためにどんな活動に取り組むのか)にすることで、生徒が見通しをもって学習に臨むことができた。

○第5時の活動では、身に付けたい力を確認し、「考えを述べる際のポイント」を意識しながら交流活動に臨むことで、生徒一人一人

が身に付けたい力に近づくことができた。

○学習を調整する場を設けたことにより、生徒が交流前と後での自己の変容を自覚し、単元を通して身に付けたい力を実感することに繋がった。

○単元を通して身に付けたい力を、読書を通じて日常生活と結び付けることにより、日々の学習が日常生活や、生きる力を育むことに繋がっていると実感することができた。

△古典を学ぶ必然性について、さらに日常と繋げて考えていく必要がある。なぜ、古典を学ぶのかを、子どもたちが理解できるようにしたい。

→古典には様々なものの見方・考え方が描かれていることを知り、それらが現代にも生きている所もあれば、違う所もあるということを導入時に知ること、古典を学ぶ必然性をもっと高めることができたのではないかな。

(2) 研究内容2について

○学習の個性化を図り、一人一人が追究したい個人テーマを立てることで、古典という教材に対しても、興味をもって主体的に学習に臨む姿勢がみられた。

○素朴な疑問を出発として個人テーマを立てることにより、古典という遠く離れた時代に書かれた作品の登場人物に対しても、親近感をもち、個人テーマを立てることができた。

○話し合いのポイントを掲示し、交流活動に取り組むことで、交流活動の質や、全体交流での発言の質が向上した。また、生徒一人一人に仲間の発言を繋ぐことを意識して発言しようとする姿勢がみられた。

○交流活動では、「疑問に思う点、不安に思う点、さらに考えてみたい点」を事前に考えて活動に臨むことによって、教師の机間巡視を待つことなく、主体的にグループでの交流活動を進めることができた。

△一斉指導の中では、一人一人が立てた個人テーマをより質の高いものへと変化させるための指導をさらに充実させていく必要がある。

→一人一人が質の良い個人テーマを立てられるように、問いを立てる際のポイントを再確認し、生徒自らが確認する時間を設けることで、より主体的に、自らの学びを深められると感じた。

△「疑問に思う点、不安に思う点、さらに考えてみたい点」を考えることができない生徒が

いた。

→「疑問に思う点、不安に思う点、さらに考えてみたい点」を考える際の視点などを例示し、全ての生徒が準備した状態で交流活動に臨むことができるようにする。

△「知識」や「経験」と結び付けて話すという点において、「知識」は誰の視点を通してても普遍的であるが、「経験」は個人による差が生じてしまう。

→「知識」と「経験」を列挙せず、それらの定義を明確化し、区別する。

△「経験」と結び付けて話すことができた生徒は多くいたが、「知識」と結び付けて話すことができた生徒は少なかった。

→他の単元との連携を図ったり、読書生活に繋がったりすることで、身に付けた知識が他の場面でも生かされる実感を得られると考えた。

6 おわりに

本研究を通し、主体的・対話的で深い学びを実現する交流活動は、一朝一夕で成り立つものではないということを実感した。

今回話し合いのポイントなどを意識して話すことができるよう指導し続け、生徒が身に付けることができた力をこの単元の学習のみで終わらせるのではなく、継続的に活用する場面をつくることで、身に付けた力を活用しながら、主体的・対話的に学び続ける生徒を育成していきたい。この経験を生かし、さらに研究と修養に努めたい。

7 参考文献

- ・文部科学省 (2018)
「中学校学習指導要領解説 国語編」
東洋館出版社
- ・文部科学省 中央教育審議会 (2016)
「中央教育審議会答申」 明治図書出版